

# M男にはっきり話させたり、さっさと行動させるための指導

— 学級指導、国語・音楽の指導を通して —

安本憲司・中村智美・竹本紀子

生徒名 K・M 高等部2年(17歳・男) ダウン症 本校中学部卒業 IQ…47(WISC)

## 1 実態の把握と個人目標の設定

### (1) 諸検査によるM男の実態

- WISC(昭和56年4月実施)……IQ 47 MA 8:2 CA 13:11
- 職業適性検査(昭和57年3月)……指示に対する理解力に劣る。動作が遅く能率が悪い。
- WISC-R(昭和57年6月)……言語性IQ 全検査IQとも測定不能。
- S-M社会生活能力検査(昭和58年5月)……SQ 39 SA 6:1 CA 16:0
- 精薄者社会生活能力調査(昭和58年6月)……つり銭計算、時刻・カレンダーの読み取り等ができない。

検査全般から判断して、自己の能力を最大限に発揮する努力に欠けており、指示の言葉に対する理解度が低いことも相まって、結果はかんばしいものではなかった。

### (2) 性格・行動上の特性

気分によって行動が左右されやすい。指示を与え過ぎるとすねて素直に行動できにくい。言語が不明瞭であり、小声でボソボソと話す事が多く、周りの人に意志が伝達されにくい。人前でしゃべったり、知らない人と応対したりする場面では、話すことに対する抵抗が大きく、口ごもってしまう。常にマイペースを保ち、集団生活をしたり、作業をしたりする場面では、周囲のペースより遅れる事の方が多い。

### (3) 個人目標の設定

以上述べた実態から、M男にとって最も指導を必要とする面について検討することにした。彼が学校生活において最も不都合を感じているのは、言葉の問題である。言語による自己表現力が向上すれば、本来備わっているM男の能力も今以上に引き出す事ができるであろうし、交友関係も今以上に円滑にいくであろう。また、動作が遅いことによる弊害も多くの場面で見られる。友だちと同じ時間内に同じ動作ができるようになれば、作業面においても能率が上がり今以上に積極的に取り組むであろう。

そこで我々は、M男の個人目標を次のように設定し、指導を重ねていくことにした。

『日常生活を通して、適切な言葉による自己表現ができるとともに、集団の流れに応じた行動ができる。』

この目標は、学校生活全般において達成されるべく指導しなければならないのは当然であるが、ここでは特に学級指導、国語・音楽の指導に焦点を当て、M男の変容について述べたい。

## 2 目標達成に向かって

### (1) 適切な言葉による自己表現のさせ方

M男はダウン症児である。助詞を使って、主語・述語を正しく配列した話し方が苦手である。その上、はっきりと単語を発音することも少ないため、話し言葉は非常に不明瞭である。

そこで、言語指導のポイントを次の三点に置いてみることにした。

- 正しい文法による話し方を意識づける。
- 言いまわしにくい言葉を訓練させる。
- リラックスした雰囲気の中で、自分の意志を何とかして相手に伝えようと努力させる。

まず指導の手始めとしては、日常生活における使用頻度の高い言葉を精選し、相手に確実に伝達させることを意識づけることにした。さらにM男の緊張感を解きほぐすために、楽しい雰囲気の中での指導を試みた。具体的な考察について次に述べてみたい。

#### ① 正しい発音と正しい文法の意識づけ

##### ○単語カードによるドリル学習

「ぼくは、犬が好きです。」と言うところを、M男は、「ぼくの …… が …… 犬に好きです。」という風に話す。主語の次にくる助詞が適切でない事が多く、そのために次にくる言葉を失ってしまう傾向にある。そこで国語の時間には、バラバラの単語カードを組み立てて正しい文を構成する学習を繰り返した。そして、毎日記入する“生活ノート”の日記欄にも応用した。

国語の学習			生活ノートの指導
う し	が	います	「ぼく(は)、テレビ(を) 見ました。」
ライオン	は	つよい	「ぼく(は)、体育(を) しました。」
ぼくは	べんとうを	たべました	「ぼく(は)、ごはん(を) 食べました。」
ぼくは	みかんが	すきです	「お母さん(は)、おつかい(を) しました。」

家庭では、母親の援助を受けながら、「～は～をしました。」という意識が確実につくよう、同じパターンの日記文が毎日続いた。最初は、母親の手が加わらなければ正しく書けなかった文も、日を迫うにつれて、何とか一人で書こうとするようになり、母親をあてにすることもなくなってきた。時には、

「ぼくは、お母さんと市民会館に行きました。」

「ゾウさんと、りすと、シートー（シーソーのこと）をしています。重いのはゾウさん。」  
といった文も書くことができた。しかし、文字で表わすことはうまくなっていったにもかかわらず、話す段階になると、正しく発音できない場面が多く、自己表現力は不十分であった。

#### ○動きを伴った会話の学習

紙の上では、上手に文を構成する力を備え、正しい文法に対する意識づけができたかのようなM男であったが、言葉として自己表現する場面ではその効果も薄く、依然としてわかりにくい話し方をするのであった。その原因のひとつには、話す場面の状況を突差に判断し、適切な言葉を頭の中で構成する力が不足している事に加え、正しい発音ができないためであると考えられた。そこで、話し言葉としての意識づけをはかり、状況に応じた言葉を正しく発音できるような配慮をしてみた。物語のストーリーを劇化したり、人形劇をしたりするなかで、適切な短い言葉のやりとりを繰り返し行い、はっきりしゃべることを意識づけようとしたのである。

##### ・『ピーターパン』の劇化より

友人「おじょうさんが助かって良かったですね。」

M男「おめでとうございます。」

この“おめでとう”というお祝いの言葉が、時として“ありがとう”になることがあったが、自分の置かれた状況の把握ができるようになるにつれて、正確に言えるようになった。

##### ・『ちびくろサンボ』の劇化より

とら「ガオーッ。おまえを食べてやる。」

M男「助けてください。」

とら「だめだ。許さん。」

M男「この服をあげますから、助けてください。」

とら「それなら許してやろう。」

M男「ああ、よかった。」

こういった一連の動作のなかから、とらのせりふを受けて適切な言葉で対応することを繰り返し行なっていった。

##### ・『小人とくつや』のペープサート劇より

ペープサート作りの段階から心が弾み、自然と歌がこぼれていた。準備の段階で暖め続けていった熱い思いが、最初のせりふ“あっ、本当だ。”という言葉をはっきりと言わせた。

以上、国語の学習においては、場面に応じた言葉が、M男の頭の中にす早く用意されるよう、そして、その言葉をできるだけ正しい文法で、正しく発音して言えるような手だてを考えていった。しかしながら、M男は、人前でしゃべったり、なじみの薄い人と話したりする場面では、ほとんど口をつぐんでしまう傾向にあるため、学級会活動の中でこの問題点への

解決の糸口を見つけることを考えたのである。

## ② 抵抗なく話すための努力

毎日行う朝の会で、生徒一人ひとりの健康観察をする仕事がある。この仕事は本来学級委員長がつとめていたが、教師の意図もあり二学期よりM男に任命することにした。仕事の順序は次の通りである。

- ・皆の前に立ち、「これから健康観察をします。」と挨拶する。
- ・友だちの名前を呼び、「〇〇さん、元気ですか。」と尋ねる。同じ要領で全員に尋ねる。
- ・表に健康状態を記入する。
- ・「これで健康観察を終わります。」と挨拶する。
- ・記入したカードを保健室まで持って行き、「失礼します。」と入る。
- ・養護教諭に、「健康観察です。」と渡す。
- ・「失礼しました。」と退出し、教室に戻る。

この一連の動作は、M男にとっては中々に大変なものであった。友だちの前で話すことへの抵抗、はっきり話さなければならないという緊張感、なじみの薄い養護教諭との対応等の条件が重なって、最初は仕事を終えるまでの所要時間は長かった。しかし、毎日の繰り返しの中でその抵抗や緊張感は徐々に薄れていき、それに伴って所要時間も短くなっていった。この仕事でM男が何よりも困ったことは、“健康観察”という言葉がうまく出ないことであった。何度も練習したにもかかわらず、言うたびにつかえたり間違えたり連続であった。担任が、どうしたものかと思案にくれていた矢先、M男は、“健康観察”という言葉をも“保健観察”に置き換えてしまった。それからというもの、ずっと保健観察で通し、担任としても意味が通じる以上、支障がないものとしてこれを通させることにした。

それにしても、M男にとっては頭の中の意識とは別に、非常に言いまわしにくい言葉があることがわかり、それを他の言葉に置き換えて場をつなぐM男の知恵に感心させられたものであった。この言いまわしにくい言葉というものが、日常生活の中で果たしてどれくらいあるものなのか観察してみると、案外と多い事に驚かされた。つまり、一音一音を切り離して発音する事は可能だが、それが言葉としてつながると、うまく発音できないケースが多いのである。

そこで、さらに次の試みをした。

## ③ 正しく発音できる喜び

M男は音楽の時間が大好きである。歌を歌ったり、音楽に合わせて身体表現をしたり、軽快なリズムに乗って簡単なステップを踏んだりする時のM男の表情は、いつも生き生きと輝いている。発音は不明瞭にもかかわらず、歌う時には恥ずかしさも吹っ飛び、大声を張り上げて楽しむ。

正しい発音を意識づける余り、教師が彼の言葉に対して注意し過ぎることがあるならば、M

男の個人目標を達成するどころか、かえって口を閉ざしてマイナスの効果が表われる可能性もあるわけであるが、楽しんで取り組む音楽の時間に、正しい発音に関する訓練を取り入れるならば、抵抗なく受け入れてくれるのではあるまいか、と考えたのである。特に歌唱においてはテンポの遅い曲を取り入れたり、繰り返し言葉の多い楽曲を設定したりするなかで、言いまわしにくい歌詞の指導も可能と思われた。以上の理由から、正しい発音で歌いこなすことを意識づけ、日常生活への応用をはかったのである。

- ・速度が♩ = 60程度の楽曲の設定……「かえるの合唱」「もみじ」「聖夜」等
- ・一音符一音節の楽曲の設定……「春が来た」「こぎつね」等
- ・繰り返し言葉のある楽曲の設定……「もしも明日が」「雪のワルツ」等
- ・テレビのアニメーション主題歌の設定……「ウルトラマン」「あられちゃん」等

これらの楽曲は、一音節から次の音節への移行に時間的な余裕があり、頭の中で次から次へと言葉が準備されやすいこと、テレビの人気番組のテーマ曲といった意欲や関心の度合いが非常に高いこと、といった利点があるため、M男に対して発音の矯正を繰り返し試みたにもかかわらず、飽きることなく取り組むことができた。とりわけ「春が来た」の歌唱は、生徒集会時に全校生徒55名と全教官26名の前で独唱するという大役を果たしたのである。

最初は言いまわしにくかった言葉であっても、訓練を重ねることによって正しい発音を要求する事は可能であるという見通しが立ち、本人も満足するのであったが、この自信を日常生活に結びつけようとする時、教師の思わくとは逆に効果が上がらない事が多かった。すなわち、訓練によって一つの楽曲をほぼ正しい発音で歌い通す事はできるようになっても、これはあくまでも歌唱の上での効果であり、そのために日常生活の会話が円滑にいくとは限らないのである。あらかじめ設定された言葉というものは、彼自身がさぐり、構成した言葉とは全く異なるものであるため、いかに正しい発音をマスターしようとも日常生活への応用という点においては、結びつきが薄いのである。しかし、歌詞指導の中でM男は、言いまわしにくい言葉でも練習すれば上手に言えるものである、という自信を持ち、満足したことは事実である。

## (2) 集団の流れに応じた行動のさせ方

動作が緩慢であり、常にマイペースを保って行動するM男であるが、“なぜ早く行動しなければならないのか” “人より遅れるということが、どれだけ自分にとってマイナスになるのか” といった根本的な概念を理解する力が不足しているため、意識の向上をはかるのが難しい実態である。

この問題点は、学校生活の多くの場面にお



いて見受けられる。

- ・教室移動が人より遅れる。
- ・食事が遅い。
- ・着替えが遅い。
- ・作業量が少ない。

動作を早くさせるためには、言葉による指示をしたり、せき立てたりする方法もあるが、加えてM男がどうしても早く動かなければならないという必要感に迫らせるような場面を設定していくことが大切と考える。遅いことによる本人への不利益を自覚させることができるならば効果も上がるものと思われたのである。

#### ① 行動が遅いと損をするという意識づけ

M男の問題点の中から、特に着替えと食事の面についての指導を述べることにする。

教室 → 更衣室 → 教室というルートで、一番の障害は、もちろん衣服の着脱にかかる時間が多い事にある。ボタンの着脱、ズボンの着脱といった個々の動作における障害はさして見当たらないが、服のシワをひとつひとつ丁寧に伸ばしてみたり、小さなシミを見つけては、執ように払ってみたり、といった余分な動作が加わるために遅くなる事がわかってきた。そこで、「着換えを5分間で、を合言葉に毎日計時を行ない、その評価を○と×で知らせた。多少の効果はあったが、教師の満足する域に到達するには至らなかった。そのため「5分経っても教室に戻って来ない時には、朝の会（帰りの会）を始めます。」ということにして、実際にM男を待たずに学級会活動を始めることを試みた。会の途中で入ってくるM男には、遅くなった詫びの言葉を言わせて着席させることにした。M男は、これが大いにこたえたと見えて、その後は会の始まる前に入室しようとあわてふためいて行動する傾向が見られるようになった。

また食事の面では、ダウン症児であることもあり、そしゃくがうまくいかないという生来の障害があるにせよ、時間の短縮は可能であると判断できた。すなわち「いただきます」を言う前から暫くは、食器の位置を整えてみたり、牛乳パックのふたをいじくり回してみたりして、食物が中々口に入らないのである。指導を手がける前は、たっぷり30分かかって食事をしており、誰もいなくなった食堂でゆっくりと口を動かしていたものである。そこで、「食事は20分間で」を合言葉に指導を始め、奮起を促すために、時には5分刻みに大声で計時したりもした。しかし、20分間で食べ終わる必要感には彼自身にはないわけであるから、23分くらいまで短縮することはできても、それよりも早くなることは滅多になかった。そのため、「20分経ったら食べるのをストップしてもらいます。残った分は先生がもらいます。」とあって、1~2度ばかり残ったパンや牛乳を取り上げる真似をしたが、こと食べる事に関しては、実際に取り上げてしまうわけにはいかず、それが本人にもわかっていることもあり、これ以上の効果は期待できそうもない。また、そしゃくしたり、飲み込んだりする動作そのものに障害があるため

に、早く早くとせき立てることにより、M男に能力以上の負担をかけるようになっても困るため、無理のない範囲で努力させることを続けなければならないと思うのである。本人にとっては、食事時間を5分以上も短縮できたことは、大いに努力した結果であったろうと判断している。

## ② 必要に迫られて速く動こうとする意識づけ

M男が音楽好きであることは前にも述べたが、ピアノやレコードの音に合わせて行なうゲームの中で、緩慢な動作の解消を試みることにしたのである。リトミック的な指導等で、音楽の途中で動作を止めたり、別の動作をしたりする学習をすることがあるのだが、ここでM男を一人で動作させることをせず、動作の速い生徒と組ませる方法をとったのである。

- ・音楽に合わせて行進 → 音楽が止んで静止、の繰り返し。
- ・二人組で目的地までステップし、戻ってくる。
- ・ジャンカ風の創作ステップを、みんなで連らなって行なう。
- ・「なべなべそこぬけ」「おちゃらかホイ」といったゲームの応用をする。

二人あるいは集団で一連の動作を行なうことにより、立つ、しゃがむ、動く、止まる、跳びはねる、手を上げ下げする、といった身体の各部位をす早く動かす感覚をつかませるのである。殊に動作の速い生徒と手をつないだり、身体接触をすることにより、反応速度を速めることができ、これに慣れた段階で、今度は一人で動作をさせるのである。最初は緩慢に動いていた身体の各部位も、徐々にではあるが速く動くようになってきた。

## 3 考察とまとめ

M男の個人目標として掲げた二つの問題点は、社会生活に適應する上での重要な指導項目である。言葉による自己表現が円滑に行なわれないうちに、彼は時として欲求不満を起し、家庭では衣服や寝具をボロボロに引き裂いて、母親を困らせる場面が見られたし、動作が緩慢であるために、職場実習や作業実習では仕事の能率が上がらず、就職の見通しも立ちにくい現状であることを思えば、何となくでもこの目標達成に向けての努力が必要となってくる。しかしながら、幾つかの要因がからみ合って、十分な効果が上げられないまま現在に至っていることも事実である。効果の上がない要因として挙げられるものを幾つか探ってみることにする。

### (1) 機能面における問題点

- ・言語治療という面から考えて、年齢的には効果が薄いこと。  
正しい文法とか正しい発音とかいったことに対する意識づけは、早い時期に行なわれなければ効果は薄いと思われる。言葉に対する自分なりの間違った解釈が定着しているため、矯正を試みても、一時期は向上するが、元に戻ってしまう事の方が多い。
- ・従来のゆったりとした生活環境からの脱皮ができにくいこと。

母からの連絡では、「日曜日の朝でもあり、遅くなって起きて、二人してのんびりと食事をしました。」といった文章が時折見受けられ、時間に制限される事なく着替えをし、食事をし、散歩をするリズムが続いていることが示されている。学校内の一場面で、す早い動作を要求することはあっても、その要求が継続して行なわれない限り、効果は薄いと思われる。

- 生まれながらの障害が発達を疎外していること。

食物をそしゃくし、飲み込むといった動作は、本人の努力いかににかかわらず、大きな効果は期待できないように思われる。また、疲れやすいといった体質から、本人が無意識のうちに作業の手抜きをしていることも考えられ、指導効果の上がらない一因となっているようでもある。

## (2) 心情面における問題点

- M男自身、言葉がうまく出ないという自覚があること。

このために、人前に出て注目を浴びながら話をすることにちゅうちょする傾向がある。自分をよく理解してくれていると思われる担任とか、柔かい物腰の女教師とか、心の優しい友だちに対しては、つまりながらも何とか意志を伝達しようとするが、そうでない人に対しては、緊張のあまり固く口を閉ざしてしまうことも少なくない。

- 指示されることに抵抗があること。

「ゆっくり話してごらん。」とか「早く動こうね。」といった通り一べんの指示語では効果が上がらないため、時として指示語を二度、三度と繰り返す事があるが、もともと人から指示されることを好まないため、わざと逆の振る舞いをすることも起こってくる。

- 機敏な動作をする必要感を持たないこと。

人と同じ動作ができなくても、最終的にはしているのだ、という意識があり、全くできなくて困難を生じるわけではないため、さほど苦にならない様子である。作業面においても働く厳しさや就職するために努力しなければならない事を説き、自分のノルマを果たすために真剣に取り組む事の大切さを意識づけようとするのであるが、卒業後の自分の生活にまで思いをはせる力は不足している。

以上の要因をひとつひとつ克服して初めて個人目標が達成できるわけであるが、今のところ目に見えて向上してきているとは言えない。しかし、一年間の取り組みの中で、M男自身の心に二つの目標を植えつけることは出来た。「先生、着替えの……を、早くします。」と言って、そそくさと教室を出て行くM男。朝の会で、「〇〇君、元気ですか。」がすらすら言えるようになったM男。空っぽの食器を示して、「先生、今日はバツか。」と、がっかりしているM男。ほんの少しずつではあるが、M男は前進していると思っている。ちっぽけな前進であっても、それを認めてにっこりするM男に対して、我々は、今まで以上の知恵をふり絞って指導にあたらなければならないと思うのである。残された一年間を、M男と共に真剣に歩み続けたいと考えている。